

「日本のことば遊び」

群馬県立女子大学 北川 和 秀

1、万葉集のことば遊び・文字遊び

- ①……み山には 射目立て渡し 朝狩に 十六履み起し 夕狩に 鳥踏み立て……
(六・九二六)
- ②若草の新手枕を枕き初めて夜をや隔てむ二八十一あらなくに
(二一・二五四二)

③たらちねの母が飼ふ蚕の繭隠りいぶ(馬声蜂音)せくもあるか妹に逢はずして
(二二・二九九一)

④……わが着たる 衣は穢れぬ 見るごとに 恋はまされど 色に山上復有山ば 人
知りぬべみ……
(九・一七八七)

⑤海津路乃 名木名六時毛 渡七六 加九多都波二 船出可為八
(九・一七八一)

⑥言云者 三々二田八酢四 小九毛 心中二 我念羽奈九二
言にいへば耳にたやすし少くも心のうちにわが思はなくに
(二一・二五八一)

⑦百濟野乃 芽古枝尔 待春跡 居之鶯 鳴尔鷄鷓鴨
百濟野の萩の古枝に春待つと居りし鶯鳴きにけむかも
(八・一四三二)

⑧よき人のよしとよく見てよしと言ひし芳野よく見よよき人よく見
(二・二七七)

⑨来むといふも来ぬ時あるを来じといふを来むとは待たじ来じといふものを
(四・五二七)

⑩ 霍公鳥を詠む二首
霍公鳥今来鳴き始む菖蒲藪くまでに離るる日あらめや毛能波三箇の辞を闕く
(一九・四一七五)

わが門ゆ鳴き過ぎ過ぎ渡る霍公鳥いや懐かしく聞けど飽き足らず毛能波氏乎六箇の辞を闕く
(一九・四一七六)

尼の、頭句を作り、大伴宿祢家持の、尼に詠へらえて末句を續ぎて和ふる歌一首
⑪佐保川の水を塞き上げて植ゑし田を尼作る 刈る早飯は独りなるべし家持續ぐ
(八・一六三五)

⑫鑑子に湯沸かせ子ども櫛津の檜橋より来む狐に浴むさむ
さしなべに、湯を沸かせよ、人々よ。櫛津の檜橋を渡つて、コンコンと鳴いて来る狐
に浴びせてやろう

右の一首は、伝へて云はく、一時に 衆 集ひて宴飲しき。時に夜漏三更にして、狐の声聞ゆ。
爾乃衆 諸興麻呂を誘ひて曰はく、この饌具、雑器、狐の声、川、橋等の物に闕けて、但に歌
を作れといへれば、声に應へてこの歌を作りきといふ。
(二六・三八二四)

2、竹取物語、土左日記のしやれ

①……駿河の国にあなる山の頂にもてつくべきよし仰せ給ふ。……御文、不死の薬の
壺ならべて、火をつけて燃やすべきよし仰せ給ふ。そのよしうけたまはりて、つはも
のどもあまた具して山へ登りけるよりなん、その山をふじの山とは名づけける。その
煙いまだ雲のなかへたち上るとぞ言ひ伝へたる。
(竹取・末尾)

②藤原のときざね、ふなぢなれど、むまのはなむけす。
(土左・二月二日)

③ありとある上下、わらはまで酔ひ痴れて、一文字をだにしらぬ者しが、足は十文字に
踏みてぞあそぶ。
(土左・二月二四日)

3、懸詞(掛詞)

・風ふけば沖つしら浪たつた山夜半にや君がひとり越ゆらむ
波が立つ
龍田山(地名)
(古今集九九四)

4、物名歌
・いさゝめに時待つ間にぞ日は経ぬる心ばせをば人に見えつゝ
(古今集四五四)

(かりそめにその時を待っているそのあいだに、日は経ってしまつた。わたくしの気
持をあなたの方にたびたび見えるようにしていながら) 笹、松、枇杷、芭蕉葉をよ
みこむ

5、折句

①むかし、をとこありけり。そのをとこ、身をえうなき物に思ひなして、京にはあらし、あづまの方に住むべき国求めにとて行きけり。もとより友とする人ひとりふたりしていきけり。道知れる人もなくて、まどひいきけり。三河の国、八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河の蜘蛛手なれば、橋を八つわたせるによりてなむ八橋といひける。その沢のほとりの木の蔭に下りて、乾飯食ひけり。その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。それを

見て、ある人のいはく、「かきつばたといふ五文字を句の上にすゑて、旅の心をよめ」といひければ、よめる。

から衣きつゝなれにしつましあれば

はるばるきぬる旅をしぞ思ふ

とよめりければ、皆人、乾飯のうへに涙おとしてほとびにけり。
(伊勢物語 第九段)

←から衣
① かつつなれにし
② ましあれば
③ はるばるきぬる
④ びをしぞおもふ

②言の葉も常盤なるをば頼まなむ松を見よかし経ては散るやは(小野小町)

言葉も不変であるのを頼りにして欲しい。松をご覧なさい。時が経っても散つたさしりません。

言の葉は常懐かしき花折るとなべての人に知らすなよゆめ(応えた人の歌)

あなたの言葉はいつも懐かしい花を折るようだと、他の人達には決して知らせないでくださいな。

(『新撰和歌髓脳』(平安時代の歌論)に見える)

←
① ことのはも
② きはなるをば
③ たのまなむ
④ まつをみよかし
⑤ てはちるやは
←
① ことのはは
② こなつかしき
③ はなをと
④ べてのひとに
⑤ しらすなよゆめ

*小町は「琴たまへ(琴を貸してください)」と頼んだのに、相手は「琴は無し」と断っている。

③

←
① あくびがでるわ
② いやげがさすわ
③ にたいくらい
④ んでたいくつ
⑤ めけなあなた
⑥ べってころべ

(谷川俊太郎の作品)

*けなし言葉の羅列であり、単純に読めば女性からの「さようなら」のようであるが、各行の最初の字を拾うと「あいしてます」ということばが浮かび上がる。

6、沓冠の歌

・夜も涼し寝覚めの仮庵手枕も真袖も秋に隔てなき風(兼好)

夜も涼しい。目が覚めたこの仮の廬では、腕枕も衣の袖も変りない秋風が吹いて行く。

・夜も憂しねたく我が背子果ては来ずなほざりにだにしばし訪ひませ(頼阿)

夜もつらい。憎たらしくもあなたはついに来ない。たとえかりそめの気持ちでも良いから、しばらく訪ねてきてください。

(『続草庵集』(南北朝時代の歌人、頼阿の歌集)に見える兼好との贈答歌)

←
① よもすず
② ねざめのかりほ
③ たまくらも
④ まそもあき
⑤ だてなきか
→
① よるもう
② ねたくわがせ
③ はてはこず
④ なほざりにだ
⑤ しばしとひませ

*兼好は「米たまへ、銭も欲し」と頼阿に無心し、頼阿は「米はなし、銭少し」と返している。句頭の連続と、句末の連続とに意味を持たせている歌を「沓冠の歌」という。

*別バージョン

- 一番はじめは一の宮
- 二は日光の東照宮
- 三は佐倉の宗五郎
- 四はまた信濃の善光寺
- 五は出雲の大社
- 六つは村村鎮守様
- 七つ成田の不動様
- 八つ八幡の八幡宮
- 九つ高野の弘法様
- 十は東京招魂社

・京都の東西の通りの数え歌

- まるたけえべすにおしおいけ 丸太町・竹屋町・夷川・二条・押小路・御池
- あねさんろつかくたこにしき 姉小路・三条・六角・蛤薬師・錦
- しあやぶつたかまつまんごじよう 四条・綾小路・仏光寺・高辻・松原・万寿寺・五条
- せつたちやらちやらうおのたな 雪駄・(鍵屋)・魚の棚
- ろくじようさんてつとおりすぎ 六条・三哲
- ひつちようこえればはつくじよう 七条・八条・九条
- じゆうじようとうじでとどめさす 十条・東寺

11、尻取り歌

- ・いろはに金平糖、金平糖は甘い、甘いはお砂糖、お砂糖は白い、白いはうさぎ、うさぎは跳ねる、跳ねるは蚤、蚤は黄色い、黄色いはバナナ、バナナは高い、高いは屋上、屋上は怖い、怖いはおばけ、おばけは消える、消えるは電気、電気は光る、光るはおヤジの禿頭

*別バージョン1

- ・いろはに金平糖、金平糖は甘い、甘いはお砂糖、お砂糖は白い、白いはうさぎ、うさぎは跳ねる、跳ねるは蛙、蛙は青い、青いは葉っぱ、葉っぱは揺れる、揺れるは地震、地震は怖い、怖いはおばけ、おばけは消える、消えるは電気、電気は光る、光るはおヤジの禿頭

*別バージョン2 (古そう。すみません。ちよつと汚い)

- ・いろはに金米糖、金米糖は甘い、甘いは砂糖、砂糖は白い、白いはうさぎ、うさぎは跳ねる、跳ねるは蚤、蚤は赤い、赤いはホウヅキ、ホウヅキは鳴るよ、鳴るのはおなら、おならはくさい、くさいはうんこ、うんこは黄色い、黄色いはバナナ、バナナは高い、高いは十二階

※「十二階」は、浅草公園にあった凌雲閣の俗称。展望台兼レストランで、明治三年（一八九〇）完成。東京一の高さを誇る建物として連日見物客でにぎわった。大正一二年（一九二二）の関東大震災で、八階部分から折れた。

12、など、無理問答など

- ・上は大水、下は大火事、何だ？（などなど）

- ・ゆがんだ松とかけて何と解く 郵便屋さん解く その心は？（三段など）

- ・一枚でも煎餅とはこれ如何に 一個でも饅頭と言うが如し

- ・一羽でも鶏とはこれ如何に 一羽でも千鳥と言うが如し（無理問答）

- ・下戸にご飯（猫に小判）（地口）

- ・恐れ入谷の鬼子母神、その手は桑名の焼蛤、おっとガッテン承知の助、来たか長さん待ってたほい、結構毛だらけ猫灰だらけ（無駄口）

13、文字遊び

- ・吹からに秋の草木のしほるればむべ山風をあらしといふらむ （古今集二四九）
（吹くとともに秋の草木がしおれるので、なるほど山風を「あらし」と言うのだから。）

- ・戀（恋）……いと（糸）し、いと（糸）しと言う心

- ・櫻（桜）……二階（貝貝）の女が気（木）に掛かる

- ・八十八歳を米寿、七十七歳を喜寿（喜の字の崩し字から）、九十歳を卒寿（卒の字の崩し字から）、九十九歳を白寿（百に一画足りない）